

カムイヤキ

■ 出土地：普天間後原第二遺跡

「まいコレ」では、収蔵庫に眠るイチ押し^いの出土品を、月替わりでご紹介。今月は、グスク時代の代表的な遺物として知られるカムイヤキです。

普天間^{ふてんま}後原^{くしばる}第二遺跡から出土したカムイヤキは、口縁は大きく外反し口唇部の断面は三角形状を呈^{てい}しています。内外面ともに指ナデによる口調整の痕跡が見られますが、内面には格子目状^{こうしめじょう}の叩きも残っています。文様は肩部に波状文^{はじょうもん}が施^{ほどこ}されています。胎土^{たいど}は石英^{せきえい}や石灰質の砂粒を含む暗灰色で、芯^{かっしょく}は褐色です。このカムイヤキは、底部から口縁部まで残っていたので復元することができました。

カムイヤキは、11～14世紀に徳之島^{とくのしま}で生産された焼物のことで、グスク時代に琉球列島全域に普及しました。また、長崎産^{かっせきせいいなべ}の滑石製石鍋や中国産^{はくじ}白磁、炭化した稲や麦などと一緒に見つかることから、当時の交易や稲作などの初期農耕との関連性を窺^{うかが}うことができます。



復元前のカムイヤキ



肩部分の復元作業状況